



清新二中だより

教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

心配する

校長 白石 亨

2月は暦の上では立春を迎えるが、実質的には一番寒さが厳しくなる。

空気は澄んでいて透明だが、凍てつくように冷たく、風が吹くと耳がじんじん痛くなる。このようなときこそ防寒着が有難い。本校の生徒たちもマフラー、手ぶくろ等を身に付けて登下校している。先日、たまたま赤色のマフラーが目にとまり声をかけた。「お母さんの手作りです・お気に入りなんです」と女子生徒がニコリと答えてくれた。どうやら小学生のときから愛用しているらしい。よく見ると確かにところどころに毛玉ができており、長い期間使い込まれていた。子どもが寒かろうと手作りしたマフラー。冬の寒さを心配するお母さん。生徒はその優しさをしっかりと受け止め、毛玉の数だけ愛着が深くなっているように思えた。

「子育ては心配することにある」と断言する人がいる。

自分も一人の親の立場として考えてみると、確かに、誰に強制されたわけでもないのに、まして子供に頼まれたわけでもないのに、一人で勝手に心配してきたところがある。特に子供がまだ幼い頃は、部屋の中にネジ一本落ちていれば、ああっ大変だ、飲み込んだら一大事！とあわてて拾い上げる。また食欲がないと聞けば、身体の調子が悪いのではないかと心配になり、あわてて夜間でも診てもらえる病院を探したりもする。

だが、子供が大きくなり、中学生ともなってくると少々事情はちがってくる。

昨年、二学期末に三者面談が行われたが、一緒に来校してくる親子を見ていてそう思った。普通、親子であれば肩を並べて一緒に歩いて学校に来ればよいと思うのだが、なぜだか一定の距離を保って離れて歩いていた。母親よりも少し前を歩き、息子は終始無言で不機嫌そうな顔に見えた。母親が声をかけるのだが、振り向こうともしない。いかにも一緒に歩くのが嫌そうな素ぶりにも見えた。親子ケンカかなあ・と思えたが、しばらくその様子を眺め生徒の顔を見ていると遠い昔の記憶が思い浮かんできた。自分の中学生時代の顔である。同じ顔だと思えた。自分自身にも一時期、親と一緒に外を歩きたくないと思っていた時期があったのだ。特に親と一緒にいるところを同学年の友達に見られるのが嫌だった。自我が芽生え独立心がムクムクと顔をもたげ、他人からの視線を強く感じてくると必要以上に意識して親とのかかわりを避け距離をとりたがる時期が訪れてくるのだと思う。

子どもが幼いときは保護者は落ちているネジを回収すればいいし、体調が悪ければお医者さんに連れて行けばよかったが、子どもが中学生になると保護者が回収できない心配ごとが増えてくる。子供がつくる自立心の中には保護者が入り込む隙間はなくなってくる。子どもは自分自身でネジを拾い出していくのだ。

でも、それでも、親は心配する。わかっていても心配し続けるのだと思う。

昨年12月に校内マラソン大会が行われた。マラソン大会ではその安全を確保するため、多くの保護者の方々にもご協力をいただき、沿道を力走する生徒を見守っていただいた。ちょうど正門から見える荒川沿いの緑道の大きな木のたもとにも立っていただき、声を掛けていただいたが、しばらくその光景を眺めていると「親」の漢字が思い浮かんできた。漢字は象形文字である。本来の「親」の漢字の成り立ちとはスジが違うのだが、自分には「木」のわきに「立」って「見」る、との形・意味合いに思えてきた。子どもが幼いときにはたくさんの手を掛け目もかける。そして中学生、高校生、大人になってからも親はいつも木陰に立って、そっと遠くから見守り、心を配り続ける。つまり、心配し続けていく存在であるように思えてくる。